
Scientific Approaches to Language No.4 March 2005

はしがき

神田外語大学大学院言語科学研究センター（CLS）の2004年度における研究活動の成果の一端として紀要の第4号を刊行いたします。

CLSでは、通常の活動として、主に理論言語学の観点から、井上和子CLS顧問による定期研究会、言語学コロキアム（2004年度は4回開催、巻末のコロキアム報告参照）を開催しておりますが、そうした通常の活動に加え、言語、および言語教育と関わる分野の公的補助金による研究プロジェクトを支援してきています。今年度は、継続中のプロジェクト、『テキスト理解と学習ーテキストの言語の特徴が理解と記憶に与える効果についてー』（研究代表者：堀場裕紀江／研究分担者：長谷川信子、井上和子、小林美代子、他）、および『静岡県下「言語の島」における言語変容に関する基礎的研究』（研究代表者：木川行央）に加え、新たに、2つの公的補助金によるプロジェクトが発足しました。

一つは、日本学術振興会科学研究費の補助金（基盤研究(B)）による小林美代子助教授を研究代表者とする3年間の『早期英語教育の指導者養成及び研修の実態と将来像に関する総合的研究』（研究分担者：長谷川信子、堀場裕紀江、他）で、2002年度より公立小学校における「総合的な学習の時間」を使つての「外国語活動」としての英語教育が導入されましたが、それに対し、課題タイトルの観点から「指導者」に焦点をあて、「早期英語教育」の実態を調査し、言語学、応用言語学の知見をもって、現状に即した提言を行うことを目指しています。

もう一つは、独立行政法人科学技術振興機構（JST）社会技術研究事業の公募型研究領域<脳科学と教育II>による、他大学との合同研究プロジェクト『言語の発達・脳の成長・言語教育に関する統合的研究』（研究リーダー：萩原裕子、東京都立大学（2005年度より首都大学東京））です。このプロジェクトは、2004年12月より5年間の長期計画で発足しましたが、大きくは外国語の習得と脳の機能発達の相関を探ることを目指し、より具体的には早期外国語教育と脳科学の関連を、理論言語学、応用言語学の知見から、言語能力を評価し、その能力のレベルと脳の発達、ひいては教育効果なども視野にいれた、「理論言語学」「心理言語学」「言語教育学」「神経言語学」「脳科学」などの分野を巻き込んだ学際的大型研究プロジェクトです。このプロジェクトにおいて、CLSでは、サブ領域の「言語能力検査・評価」を担当し（研究代表者：長谷川信子／研究分担者：井上和子、小林美代子、堀場裕紀江）、国際的にも確立が待たれる児童期の言語能力の検査・評価の方法を、大学生など成人に対し行われている様々な検査・評価法とも関連させながら開発することを目指しています。

上記2つの新プロジェクトは、ともに「早期英語教育」と関連するわけですが、この問題は、その発端が2002年度からの「公立小学校での英語教育の導入」であったにせよ、また、今後それを「正式な科目」として導入すべきか否かの問題とは別に、母語・国語である日本語を含めた「言語教育一般」のあり方が問われる時代が到来したことを象徴しています。こうした背景を受け、「言語研究」を専門として研究してきているCLSにおいても、これまでの理論研究と平行して、その実証・応用研究である上記2つのプロジェクトは、積極的に支援していく所存です。2004年度末には「早期英語教育コロキアム」を開催しましたが（巻末のコロキアム報告参照）、今後も継続させていきます。 ※1

本号には、論文が7本収録されており、著者名のアルファベット順に並べられておりますが、理論言語学関連の論文が5本（Fujimaki、Hasegawa、Inoue、Martin、山田）、上記の科学研究費によるプロジェクトの研究課題と関わる論文が2本（木川、小林）です。

理論言語学に関しては、Fujimaki、Hasegawa、Inoue、Martinが共に、「主語」の構造的位置に関し、異なる言語と現象、理論上の仮説と制約の観点から、考察しておりますが、日本語と英語の対照研究としても、主語位置に対する、理論的位置づけの観点からも興味深く、「主語」という古くて新しいトピックに、新しい切り口で異なった光を当てています。「が」格主語の位置に関し、MITの宮川繁氏（2004年度も2003年度に引き続き夏期に3ヶ月ほどCLSに滞在）が精力的に論文を発表していますが、宮川氏の主張にも関連し、Fujimakiの論文では「口を挟む」「手を入れる」などの熟語の受動態の可能性と文副詞の位置の考察から、vP内に生起するものがあることを、Hasegawaの論文では、機能範疇における指定部と主要部の現れ方に関する理論を提唱し、その枠組みでの疑問詞疑問文、主語、「も」格の句を考察し、「が」格主語については、vP内にある場合も、昨年のSAL3号にも掲載されたUeda（上田由紀子氏）の主張であるCP指定部の場合もありえることを、Inoueの論文では、他言語も含めた詳細なデータと理論的動向の考察を踏ま

え、従来のTP指定部だけでなく、vP指定部、CP指定部の可能性を論じています。Martinの論文 ※2 では、英語の主語の数量詞と文中の他の要素との作用域の関係から、主語の派生と構造的な位置を考察し、主語に表れる要素の意味的特性と作用域現象との関連も指摘しています。「主語」に現れる数量詞の振る舞いは、「が」格主語の位置と密接につながり、昨年のUeda論文もそうですが、上記のHasegawa論文、Inoue論文でも取り上げており、今後も、英語など他言語の現象、言語における「主題」との関連、TP、CP、vPといった機能範疇の理論的位置づけなど、現象的にも理論構築上も非常に広がり大きな問題で、CLSとしても引き続き研究を進展させたい課題です。

CLSでの理論研究として、常に研究対象としているのが、語彙の情報と統語現象、語彙概念構造との関連です。その関連で昨年の号(SAL第3号)には、Fujimaki、Hasegawa、外崎、山田の論文を発表しましたが、今第4号では、山田の論文が、移動様態動詞を用いた文に現れるアスペクト転換現象を扱い、タイプ論的にはロマンス語タイプ、英語タイプ、日本語タイプにより異なった現象が見られることを指摘し、それらは、統一論的かつ理論的な記述・説明の観点からは、統語と形態の接点に関わる形態合成プロセスの違いとして分析されるべきであることを論じています。

科学研究費補助金による研究プロジェクトとの関連で、木川の論文では、伊豆松崎町方言のアクセントは、東京式アクセントと分類されていますが、それらは一定の傾向で異なることから、特殊拍の後の下がり目によりアクセント型が一律に決められないことを確認しています。また、小林の論文では、言語能力検査結果における言語能力以外の要素の影響について考察し、英語読解力テストにおける文章の内容構成とテスト形式がどのようにテスト結果に影響を及ぼすかを、700名以上の日本人大学生を対象にした調査により検証しその結果を報告しています。

センター長である私は、2004年8月より、2月の短期帰国期間を除き、神田外語大学の長期海外研修により米国マサチューセッツ工科大学に滞在して研究活動を行わせていただいております。メールや添付ファイルといった便利な手段があるとはいえ、CLS顧問の井上和子先生、言語科学研究科の齋藤武生研究科長、CLS研究員の山田 昌史さん、事務補助員の椎名 千香子さん、はじめ、多くの方々に支えていただき、「留守中」のCLS活動を遂行してきた次第です。特に、山田さんと椎名さんには、本号の編集作業は言うに及ばず、上記の様々な研究活動を陰になり日向になり献身的に支援していただきました。心より感謝致しております。

2005年3月
言語科学研究センター・センター長 長谷川 信子
(Cambridgeにて)

※1 公的補助金によるプロジェクトの成果の一部は、「科学研究費2004年度報告書」として、『テキスト理解と学習』（プロジェクト最終年度報告書）と『早期英語教育の指導者養成及び研修の実態と将来像に関する総合的研究』が刊行されました。その目次は本号巻末に掲載してあります。これらの報告書は部数の許す限り、ご興味のある方には郵送料実費にてお分け致しております。詳しくはCLSのホームページをご覧ください。

CLSホームページ

※2 Roger Martin氏の論文は、2004年秋に神田外語大学言語科学研究科において開催された『理論言語学公開レクチャーシリーズ』においての講演の一部です。

FUJIMAKI KAZUMA (藤巻 一真)

On the Position of Nominative NPs in Japanese: The Possibility of Nominative NPs in-Situ

This paper presents some new data of the Japanese language, which show that the nominative NP, particularly the nominative subject, can stay in-situ and that in a certain case, it can not move to the Spec of TP. These examples come from a certain type of idioms with ditransitive verbs given by Miyagawa and Tsujioka (2004). Based on their observation that some idioms cannot allow displacement of their parts, we will see that in such idioms, passivization is possible only if the nominative NP (the subject) remains in-situ. This supports the analysis that the nominative subject does not have to move to the Spec of TP to satisfy a feature of T, for example, EPP (Fukui (1986), Kuroda (1988), among others). This paper found it is stronger than this. We must say that, at least in overt syntax, the nominative subject in our examples may not move to the Spec of TP. We will further observe that the same is true of the genitive NP of so-called ga-no (nominative-genitive) conversion. The examples with the idiom support the analysis which claims that the genitive NP in ga-no conversion stays in VP in overt syntax. (Watanabe (1994, 1996), Miyagawa (1997)).

NOBUKO HASEGAWA (長谷川 信子)

The EPP Materialized First, Agree Later: Wh-Questions, Subjects and Mo 'also'-Phrases

In Minimalist Program (Chomsky 2000, 2001), movement is driven by Agree and the EPP feature on a head, e.g., C for a wh-word and T for a subject. Under such a framework, little can be said about non-moved items that may still Agree with a relevant head; e.g., wh-in-situ's. Furthermore, it misses the fact that a language without overt wh-movement typically marks the status of question at head C and/or with a particular intonation pattern. For example, Japanese makes use of the question particle ka at C and the rising intonation pattern. Taking this as a significant generalization, we will propose a system where the EPP is responsible for giving rise to an item at Spec as well as for marking Head overtly, i.e., the EPP should be materialized. Agree takes over from there, taking care of both moved and non-moved items; i.e., Agree comes in later. This system makes interesting predictions concerning how the EPP of T is materialized in Japanese. Based on the data on Mo 'also'-phrases presented in Hasegawa (1991, 1994), we will argue that a Mo-phrase takes up TP-Spec as a realization of the EPP, but a nominative Ga-phrase may not, which may be at CP-Specifier at vP-Spec. Some speculations are made with respect to the EPP on T in English and the C system in general.

KAZUKO INOUE (井上 和子)

Free Constituent Order and the Subject

Starting with reviews of some recent important works on languages with free constituent order, Miyagawa's two works (2001, and to appear) related to the EPP are discussed from the viewpoints in view of some technical issues and descriptive generalizations so far accumulated concerning Japanese. It is proposed that Miyagawa (2001) be modified and augmented by the model proposed in his later work to appear. To remedy some of the inadequacies of his CP structure, I propose to have the EPP on both T and C as an optional feature. Making several revisions in technical aspects this pursuit has resulted in the claim that the Japanese subject appear not only in the Spec of TP as well as in a vP internal position, but also in the CP domain as a focus, a topic, or a quantified subject.

木川 行央

談話資料から見た伊豆松崎町方言のアクセント

伊豆半島南部の方言のアクセントは、東京式アクセントではあるが、隣接する地域や東京とはその様相がかなり異なるものとして有名である。今回は、読み上げなどの調査によるのではなく、自然な状態でのアクセントを観察するため、松崎町池代における自然談話を資料として、その実態を見た。その結果、先行研究に報告があるような揺れの大きさを確認するとともに、その揺れには東京語のアクセントとの対比の上で一定の傾向があること、男女によると考えられる差があることが確認できた。また、この方言のアクセントは、特殊拍の後に下がり目が来ることを許すが、それがアクセントの型を決めるものではないということも確認した。

小林 美代子

テストメソッド効果の考察

言語能力の評価では、測定しようとしている能力を正確に測定する必要があるが、そのためには、言語能力以外の要素の介在を認識し、可能な限りその影響を抑えることが望ましい。本論は、Bachman (1990) の枠組みに基づき、英語読解力テストに用いられる文章の内容構成とテスト形式という2変数が、日本人学習者のテスト結果に及ぼす影響を考察する。日本人大学生総計754名を無作為に12のグループに分け、4種類の文章構成及び3種類のテスト形式のうち、各々一つを割り当て、読解力テストに解答してもらった。分散分析の結果、文章の内容構成とテスト形式には相互作用があることが判明し、その影響は統計的に有意であった。さらに、学生を英語能力別に3つのグループに分けて、それぞれの変数の影響及び相互作用を検証した結果、学習者の英語能力も、規則的な影響を与えることが判明した。最後に、日本の大学入学試験英語読解テストに使用された文章の内容構成を考察した追加研究の結果を報告する。

Roger Martin

On Reconstruction in A-Chains

In this paper, I discuss some of the main arguments that have been made for and against A-movement reconstruction. I demonstrate that whereas recent minimalist theories of quantifier scope interactions (Hornstein 1995, 1999, Kitahara 1996) provide us with a very compelling reason to assume reconstruction with A-movement, the major arguments that have been put forth against such a process, most notably by Chomsky (1995) and Lasnik (1999), are not overwhelming. I argue that reconstruction is generally possible in A-chains, although it may be barred in certain instances by independent constraints. I adopt and further defend the proposal by Hornstein (1999) that reconstruction to intermediate positions in a chain is impossible as is reconstruction of a definite argument to a θ -position. Furthermore, I show that these constraints sufficiently obviate the major arguments against reconstruction with A-movement.

山田 昌史

アスペクト転換の適切な取り扱いを巡って：移動様態動詞を題材としての一考察

本稿は、Talmy (1985)に端を発する移動様態動詞に見られるタイプロジー、特に着点付加による意味的含意の言語差を題材にして、アスペクト転換を適切に分析する手段を探ることを目的とする。移動様態動詞のアスペクト転換は、語彙概念構造の観点 (cf. 影山&由本(1997)、Rappaport-Hovav & Levin (1998)等) から、また、統語論の観点 (cf. Ritter & Rosen (1998), Borer (1998)等) から、さらに、両者のインターフェイスの立場 (cf. Snyder (1995, 2001), Mateu (2002)等) からなされてきたが、本稿は特に、英語・ロマンス語・日本語の動詞の形態プロセスに注目し、Lasnik (1999)のフランス語・英語の動詞上昇の違いに関する分析を拡張し、アスペクト転換は、個別言語の動詞における形態的合成プロセス (一致・複雑述語の形成) の違いにその言語的差異の在り処を求めることを提案する。つまり、アスペクト転換は、動詞を中心とする形態合成プロセスの差の違いから導き出されることとなる。